

特別展「犬派？猫派？—俵屋宗達、竹内栖鳳、藤田嗣治～山口晃迄

山種美術館（広尾）24.05.12～06.09（前期） 06.11～07.07（後期）

本展は、近世～近代を中心に「犬・猫」を描いた日本画作品を紹介している。

初公開となる《洋犬・遊女図屏風》をはじめ、江戸時代の「伊藤若冲」「円山応挙」「長沢芦雪」に、明治時代以降の「竹内栖鳳」や「藤田嗣治」など、さまざまな画家による名作を鑑賞することができる。



長谷川派 《洋犬・遊女図屏風》 17世紀（江戸時代） 紙本・彩色

江戸時代の日本では珍しかった洋犬を描いた本邦初公開の貴重な作品である。

長沢芦雪 《菊花子犬図》 18世紀（江戸時代） 絹本・彩色

ぼかしを使って絹地に墨で「7匹の子犬たち」を表情豊かに描いた作品は、叙情たっぷりであるが、おぼろ月夜の風情には全く興味がなさそうである。

数多くの子犬がかたまっていて、ふわふわした毛さわりや、丸みを帯びた後ろ姿を素早い筆致で適格にとらえ、動きの中の一瞬を描くことで「かわいい」を演出している。西洋絵画の伝統には無かった「犬」を主役にして、そのかわいらしさを描く絵は、日本では「俵屋宗達」に始まり「応挙」「芦雪」が受け継ぎ、現代に伝えたのが日本ならではの「かわいい」文化の源泉であるとされている。

竹内 ^{せいほう} 栖鳳 ^{はんびょう} 《斑猫》 1924（大正13）年 絹本・彩色 重要文化財



モデルの「猫」は首をぐるりと右へひねり、体は背中が見えているのに、顔は180度曲がってこちらを向いている様子は、人間では考えられない柔軟さがある。「手描き金泥などで描かれた技法」で、猫の体毛一本一本が細い筆で、誠にていねいに描かれていて、無背景に毛つくりをしながら、こちらを見つめるグリーンの瞳が印象的で、毛の柔らかな質感を思わず触れてみたくなる。